

## 農二生の心に雄々しくひるがえった大団旗

ベビーブーム世代の高校生急増対策の一環として設立された我が校。その1期生は、多種多様な個性が集まり、一人の先輩もいない不安、クラブ活動にしても連盟への加入が未だ認められないなど、意気消沈するような状況が随所にあった。そんなある日、農二生を励まそうとやってきた東京農業大学全学応援団。高崎駅に出迎えた私たちの眼前に繰り広げた一糸乱れぬ機敏で迫力ある行動に、私は驚きのあまり声を失った。全学応援団とは、入学と同時に全学生が応援団員として登録される比類ない大組織。その上、全日本学生応援コンクール優勝の実績もある。私は、みんなの心の中に大団旗のような心の支えが必要であることを確信し、県内一、否、日本一の高校応援団を創ろうと決心した。

有志2〜3人でスタートし、最初は応援愛好会。幾度もの必死の交渉の末に学校に部としての認可をもらって新入部員を獲得し、遂には団組織への昇格。その過程で念願だった農大全学応援団の指導も受けることができた。挨拶や服装、リーダーの基本から応援団の精神、団員の心構え、応援の理論を教えていただいた。最初の数日間にわたる指導の成果を全校生の前で披露すると、先生方や生徒たちから称賛の声が上がり、それまでの長く孤独な練習が報われた喜びを全身で感じた。

野球部の夏の全国高校野球大会県予選が、校外活動の初デビューとなった。黒の学生服に腕章、胸に光るバッジと揃いの出で立ち。「東京農業大学——、学歌——！」私は第一声を張り上げた。全生徒の拳が右上から左下に振り下ろされ、また振り上げられる。県高校野球の歴史の中で初めて繰り広げられた神宮球場の様な光景が、観衆の目を釘付けにした。本校に対する風評、1年生であるがゆえに他校から見下された悔しさに、胸を張れる何かを求めている私たちのこれが答えだと、私は心の中で叫んでいた。

「人を応援するに足る人間の形成」が応援団の原点。その精神に一生涯引退はない。農二応援団から有為な社会人が多く輩出されることを期待している。



竹内 健さん (1期生)

初代応援団長  
マクロ株式会社 代表取締役社長



初の甲子園球場

## 創部3年目、加盟2年目でつかんだ甲子園出場

開校と同時に野球部は発足する。翌昭和38年6月に、上毛三山を一望できる鶴辺の丘に新校舎が完工するが、グラウンドとは名ばかりの荒地で、部員たちは草取りや石拾いに精を出し、やがて練習試合ができるようなグラウンドになったのは、先輩たちが高校野球最後の夏の大会を迎える39年6月中旬のこと。ツルハシやスコップをバットやボールに握り換えたときは、野球が本当に楽しかったことを覚えている。38年に県高野連に加盟が認められ、最初の公式戦となった春季関東大会県予選の初陣は屈辱的な船出であった。39年夏の全国高校野球大会県予選は準々決勝で惜敗。先輩たちの高校野球は、意志半ばで終わってしまった様に思う。

私たち1・2年生の新チームは、先輩たちが造り上げてくれたグラウンドで十分に練習を積み個人力やチーム力を付けることができた。秋季関東大会県予選の決勝戦では名門桐生高校に延長14回の死闘の末に勝利し、初優勝する。この勝利は大きな自信になった。関東大会では、決勝戦で圧倒的な強さで勝ち上がった甲府商に奇跡的な勝利で40年春の甲子園への切符を手にした。私たちは下級生の段階でも実践練習を積めたこと、チームワークがよく粘り強さを持っていたこと、チーム内でライバルに恵まれ個人力が向上したことなどが好結果につながったと思う。

甲子園では5万人の大観衆に鳥肌が立った。私は開会式直後の初戦に先発投手でマウンドに立った時、膝がガクガクするほど緊張した。修学旅行の日程を一部変更して同級生が応援にきてくれたのが心強く、背中を後押ししてもらい、本来の試合ができ初陣を飾ることができた。2回戦も逆転サヨナラで勝利し、ベスト8という結果を残せた。夏の大会は北関東大会の決勝戦で敗退し、春・夏連続甲子園出場は成らず、私たちの高校野球は終わった。

野球を通して協調・継続すること等の大切さを学び、一つの職業を40数年続けることができたと思う。また、一生の宝物である仲間を得ることができた。現役生たちには「文武両道、そして人間力の向上」を目指し、悔いのない高校生活を送ってほしいと切望する。



小林邦彦さん (2期生)

東京農業大学第三高校教諭  
野球部顧問



昭和40年春の甲子園出場

## 広がる同窓会ネットワーク[首都圏支部]

### [首都圏支部]

全国に広がる農大二高同窓会ネットワーク。中でも東京・神奈川・千葉・埼玉の熊谷周辺までをエリアとする首都圏支部には2000人以上が名簿登録されており、同窓会活動の大きな核の一つである。親睦会が3年に一度開催され、新たなつながりが生まれ、首都圏における農大二高同窓生の輪が広がっている。



農大二高は50周年を迎え、半世紀に及ぶ歴史の中で数多くの多彩な同窓生を輩出しています。各方面でご活躍されている同窓生のネットワークを広げ、より多くの人たちがつながることで、農大二高の卒業生でよかったと思えるような魅力ある首都圏支部の確立に取り組んでいきたいと考えています。現在、懇親会の案内は30期生までに差し上げていますが、もっと若い世代も対象にアプローチし、就職・仕事・結婚など様々なシーンでバックアップできるような態勢づくりを目指していきます。絆を深めることは、大きな力になります。卒業生は、住所変更などの連絡を必ず学校に入れてください。同窓会ホームページからも受け付けています。

また、一度も会に参加されたことのない方、出席してよかったという時間を過ごせますので、ぜひ次回のご出席ください。

同窓会ホームページ <http://nounidousoukai.jp/> TEL 027-323-1483 (農大二高)  
メールアドレス [kouhou@nounidousoukai.gr.jp](mailto:kouhou@nounidousoukai.gr.jp) TEL 090-1661-5278 (支部活性化委員長 渡辺美恵子)



桑原充男 支部長  
(5期生)

### 同窓生の声

杉村弥生さん (旧姓：武井 13期生)

昨年10月に行なわれた親睦会に初めて出席して、OBの方々がそれぞれ活躍なのを知り、同じ同窓生として誇らしく感じました。校歌や応援歌を声を合わせて歌うと、同窓の心を一つにできたように思います。13期生にも数名会うことができ、懐かしく嬉しいひと時でした。

池田明美さん (旧姓：吉井 23期生)

気おくれが先に立って、過去に何度かいただいた案内を欠席で出しましたが、今回は自宅から近い銀座での開催と、40歳を過ぎて過去を懐かしむ気持ちも手伝い、思い切って出席しました。23期生は一人でしたが、幹事の方が気配りしてくださって、いろいろな人と話す機会を得て、楽しく時間を過ごすことができました。アドレスを交換した人と次の機会には誘い合って、また出席したいです。

貫井健太郎さん (25期生)

首都圏支部の親睦会では、建学間もない頃にパワーを発揮された1、2期生の方々に多く接することができ、頼もしさを感じました。当時の同級生も数人いて、青春時代に戻ったように話が弾みました。新しい出会いの場、名刺交換の場、さらにはビジネスチャンスにつながることもあるので、次の機会にはぜひ出席してみませんか？